

# 春は花 夏ほととぎす 秋は月

## 冬雪さえて 冷すずしかりけり

この歌は、道元どうげんぜんじ禪師が四十五歳から五十四歳にかけて、折りにふれて詠まれた和歌六十首をあつめた『さんしやうどうえい傘松道詠』に撰められている一首で、「本来ほんらいめんもく面目」という題がつけられています。

歌の意味は「春になれば花が咲き、夏にはほととぎすが鳴き、秋には月が美しく、冬には雪が降って身が引きしまる」（西岡祖秀訳）といわれます。

さて、「本来の面目」とはいかなることでしょうか。「本来」とは、もともとの、ありのままの、真実のという意味です。「面目」とは、顔とか顔つき、すがたの意味ですから、あわせて、「本来の自己」「真実の自己」「ありのままの自己」ほどの意味をもつと考えられます。

道元禪師は、ひたすら坐禅に徹すること（只管しかんたざ打坐）こそ真実の修行であると弟子たちに教えさしました。坐禅に打ちこむことによって、自己の心身のとらわれからのがれ、自己と世界という対立を超えた本来の自己のすがたがあらわれてくるとして、このさとの境地を「本来面目」として詠まれたのです。

春に咲く花、夏に鳴くほととぎす、秋に昇る月、冬に降る雪は、それぞれに本来の面目を発揮して、絶対的真実としてあらわれています。この歌には道元禪師の透徹した宗教的境地が春夏秋冬の四季の風物に託してみごとに詠みあげられています。

道元禅師の「春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて 冷しかりけり」の歌は、中国の禅籍の一つ『無門関むもんかん』の「春は百花あり、秋は月あり、夏は涼風あり、冬は雪あり」を明らかにふまえている。禅師は、「涼風」を「ほととぎす」にあらためられた。

中村元博士はこのことについて次の如くにいわれる。「涼風は可感的であるにもかかわらず、無限定的で茫漠ぼうぼくたる感じを与えるのにたいし、ほととぎすは同じく可感的ではあるが、こじんまりとした愛らしい印象を与える。このこじんまりとした愛らしさが、すなわち日本の自然観である」と。

ちなみに、良寛和尚は「形見とて 何かのこさむ 春は花 山ほととぎす 秋はもみぢ葉」の歌を遺している。

春は花

夏ほととぎす

秋は月

冬雪さえて

すずしかりけり

曹 洞 宗

神奈川県第二宗務所

第五教区 布教部・出版部